

目的 「祭り」とは本来、神仙をまつることであり、神仙、祖霊などに奉仕して、鎮魂感謝、祈願するための儀式を言う。現代においては、記念、祝賀、宣伝などのために行なう集団的行事をも祭りと呼んでいる。本研究では、このように祭りを広義的意味で捉え、現代における青年、中年、高年の三世代の祭りに対する意識構造とその服装観について比較・考察を行ない、現代人にとっての祭りの意味とその必要性について言及することを目的とする。

方法 愛知県に伝わる51例の祭りをとりあげ、その発生や意味より、祭りをタイプ別に分類した。これをもとに「祭り」意識の分析モデルを構成し、調査表を作成した。昭和62年11月、アンケート調査を実施し、名古屋市近在の本学短大生100名、その両親100名、祖父母50名を無作為抽出し、得られたデータを単純集計、因子分析法（主因子法）、ノンメトリックMDS法を用いて、分析・考察を行なった。

結果 「祭り」意識構造を祭りへの関心度、評価、積極性という三次元に分けて測定した結果、三世代間に意識の差がみられ、祭り見物時の服装についても、世代の違いによって洋装、和装の選択に相異のあることが認められた。これらの祭りに対する意識とその服装観の世代による相異は、宗教観、余暇観、衣生活意識の差異によるものと考えられる。非日常の「晴」の日であった祭りの本来の意味を高年層の祭り意識の中に垣間見ることができたが、現代人にとって祭りとは、弱まりつつある地域の連帯感を高め、心の依所として生活を活性化する意味をもち、そこに祭りの必要性が存在すると言いうことができる。